

遠方の母

小川未明

青空文庫

正ちゃんしょうちゃんは、三つになったときに、はじめて自分じぶんには、お母さんかあのいないことを知しりました。それは、どんなにさびしかったでありましょう。みんなに、お母さんかあがあるのに、どうして、自分じぶんにばかり、お母さんかあがないのか？ それで、正ちゃんしょうちゃんは、女中じょちゅうの脊中せなかにおぶわれながら、

「お母ちゃんかあ、……お母ちゃんかあ。」と、小さな掌てのひらで、女中じょちゅうの肩かたのあたりをたたきながら、呼よびました。

それは、「私わたしには、ほかの子供たちこどものように、やさしいお母さんかあがないの？」と、たずねていることがよくわかりましたので、女中じょちゅうは、

「坊ちゃんぼっちゃんのお母さんかあは、ののさまになってしまわれましたですよ。」といって、青いあお空そらの方ほうを指さしたのであります。

しかし、ののさまということも、また、ののさまになれば、空そらへ上のぼってしまわなければならぬということも、まだ正ちゃんしょうちゃんには、わかりませんでした。いろいろかたことまじりに、女中じょちゅうに問といましたので、彼女かのじよは、

「坊ちゃんのお母さんかあは、遠いところへいつてしまわれたのですよ。」と、哀あわれな子供こどもに、

説といて聞きかせなければならなかったのです。

彼女かのじよには、どうしても、このとき、死しんでしまったということが、あまりに、子供こどもに對たいして、いじらしくていえなかったのです。

正しょうちゃんはお母かあさんが、遠とおいところへいったと聞きくと、よく女じよちゆう中ちゆうの話はなしがわかりました。いつ、その遠とおいところから、歸かえってくるかということも、また、その遠とおいところというのは、どこだろうということも知らなかったけれど、ただ、ぼんやりと、遠とおいところへいったのだということだけがわかりました。

正しょうちゃんはお母かあさんをよくかわいがってくれる女じよちゆう中ちゆうの脊せなか中ちゆうにいて、不自由ふじゆうはしなかったけれど、自分じぶんにはほかの子供こどものように、お母かあさんがないのだと思おもったときは、さびしうにみえました。そして、どんなことを、小ちいさな頭あたまの中なかで思おもっているのか、

「お母かあちゃん、……お母かあちゃん。」といって、小ちいさな掌てのひらで、女じよちゆう中ちゆうの肩かたのあたりをたたいたのであります。

ある日ひのこと、もう、夏なつでありましたから、女じよちゆう中ちゆうは手てにうちわを持もっていました。そのうちわは、毎まい日にちのように、勝手かってもとへご用ようを聞きにくる、出で入いりの商しょう人にんが暑しよち中ちゆう伺うかがいに持もつてきたのであつて、だれが描かいたのかしれないが、若わかい女おんなの人ひとが、晩ばん

方の町まちあるを歩いてゐる絵えが描かいてありました。

女じよちゆう中は、なんということなく、また深い考ふかかんがえもなく、脊中せなかしゆうの正ちゃんに、うちわを
見みせて、

「坊ちゃんのお母かあさんは、ここにいられますよ。」といって、うちわの中の女なかおんなひとの人を指ゆびさしたのでした。

正ちゃんしょうちゃんは、じつと、その絵えにみとれていましたが、

「お母ちゃんかあ。」といつて、急にきゆう、かわいらしい手てで、しっかりとうちわの柄えをつかんでしまつて、放はなしませんでした。

その絵えの女おんなひとの顔かおは、あちらを向むいてゐるので半分はんぶんしか描かいてありません。けれど若いわか、しとやかな、美しい姿すがたをしていました。そして、墨絵すみえで書かかれた町まちは、黒く浮うき出でて、町の屋根まちやねを赤く染あかめて、夕焼ゆうやけの空そらが、もの悲かなしく見みえていたのです。

子供こどもの目めに、その絵えは、どんなふうに映うつつたでしょうか。それをだれも知る人ひとはありません。しかし正ちゃんしょうちゃんは、そのうちわを持もつと、じつとその絵えに見み入いつていました。赤あかい絵えの具ぐの色いろが、水晶すいしゆうのように、清きよらかに澄すんだ、正ちゃんしょうちゃんの瞳ひとみなの中にうつるのであります。

「坊ちゃん、このうちわが、大好きですね。」と、女中は、笑いながらいました。正ちゃん、寝起きのいい子でありましたけれど、おりには、不きげんで、泣くこともありました。そんなとき、彼女は、うちわを持つてきて、

「お母ちゃんが、お母ちゃんが……。」といました。哀れな子供は、ものいわない絵に見入って、泣きやむのがつねでありました。そして、小さな指で、うちわに描かれた、女の人を指さして、

「お母ちゃん、……お母ちゃん。」と、かわいらしい声を出して、正ちゃんはいったのです。

絵は、もとよりなんの言葉もありませんでした。しかし、正ちゃんは、絵のお母さんが、笑つても見えるのか、ひとり、声をたて、自分で笑つて、なぐさめられたのであります。夏でありましたから、ちようどうちわの絵のように夕焼けのした景色が、町の中でも見られました。そのうちに、だんだん夏も終わりに近づいたのです。

暑さを忘れるようになる、だれでも、うちわを粗末にします。たいていうちわというもの、その年だけしか使用しないからです。女中も、やはりその一人でありました。ある日のこと、勝手もとで、しちりん、鍋をかけて煮物をしていましたが、その焼けた鍋

を下ろすときに、正ちゃんの好きなうちわだという考えもなく、その上におろしました。そのため、うちわの絵の描いてある表が、赤黒く焦げてしまったのです。そして、正ちゃんのお母さんも焦げてしまいました。

「お母ちゃん、……お母ちゃん。」と、正ちゃんがいったときに、女中は、その焦げたうちわを取り上げて、いまさら、自分の無分別をば、深く心に恥じながら、これを正ちゃんに渡しますと、正ちゃんは、おどろいて、そのうちわを見つめていましたが、ぱたりと手から落として、急に、悲しくなつて泣き出しました。

「お母ちゃん！ お母ちゃん！」

なんといつても、呼びつづけてやみませんでした。女中は、困つてしまった。しかし、自分が悪いのだと思つて、

「さあ、坊ちゃん、おんぶなさい。いいきれいなうちわを買つてきましょう……。」といいました。

彼女は、探したら、これと同じ絵の描いてあるうちわを見つけないものでもない。それでなければ、もっと美しい女の人の描いてあるうちわがあるだろうと思つたからです。正ちゃんは、すぐには、おんぶしませんでしたがお母ちゃんを描いてある、いいうち

わを買^かつてきましよといつたので、泣^なく泣^なく女^{じょ}中^{ちゆう}の肩^{かた}につかまりました。

彼女^{かのじょ}は、正^{しょう}ちゃんをおぶつて、町^{まち}の中^{なか}をぶらぶら歩^{ある}きました。

「どこへいつたら、うちわがあるだろう……。」

もはや、季節^{きせつ}が過^すぎてしまったので、荒^{あら}物^{もの}屋^やや、絵^え双^{そう}紙^し屋^やのようなところを聞^きいて歩^{ある}いてみたけれど、うちわを並^{なら}べている家^{うち}はありませんでした。

女^{じょ}中^{ちゆう}は、ほんとうに困^{こま}つてしまいました。

「いま、きつと、どこかにありますよ。」といって、彼女^{かのじょ}は正^{しょう}ちゃんをおぶつて、なおもうちわを探^{さが}して歩^{ある}いたのです。けれど、うちわはなかなか見^みつかりませんでした。たまたま売^うれ残^{のこ}りのうちわがあつても、それは、前^{まえ}の正^{しょう}ちゃんの大^{だい}好^{こう}きなうちわとは似^につきもしないもので、正^{しょう}ちゃんは、それを手^てに取^とると、だまつて捨^すててしまいました。

女^{じょ}中^{ちゆう}は、それから、まだどんなに探^{さが}して歩^{ある}いたことでしょう。

「お母^{かあ}ちゃんない、……お母^{かあ}ちゃんない？」と、脊^せ中^{なかつ}で正^{しょう}ちゃんはいいました。

「いくら探^{さが}しても、どこにも、あれと同じうちわはありませんよ。」と、彼女^{かのじょ}は、答^{こた}え
ました。

まだ、三^{さん}つの正^{しょう}ちゃんにも、その意^い味^みがわかつたものとみえて、正^{しょう}ちゃんは、女^{じょ}中^{ちゆう}

の脊中^{せなか}で大あばれをしました。

「お母^{かあ}ちゃん、……お母^{かあ}ちゃん……。」「といて、泣^なきました。

女^{じょ}中^{ちゆう}は、しみじみと、これほどまでに坊^{ぼっ}ちゃんが、ほんとうのお母^{かあ}さんのごとく思^{おも}っているものを、自分^{じぶん}が粗末^{そまつ}にしたことは、まちがっていたと、心^{こころ}から悪^{わる}かったと思^{おも}いました。そして、どんなにしても、あれと同じよう^{おな}なうちわを探^{さが}さなければならぬと思^{おも}いました。

哀^{あわ}れな彼^{かの}女^{じょ}は、町^{まち}の中^{なか}を歩^{ある}いて、歩^{ある}いてまわったのです。とうとう足^{あし}は、疲^{つか}れました。そのうちに、日^ひはまったく暮^くれてしまった。そして、秋^{あき}の夜^よらしく、淡^{うす}いもやが、一面^{めん}に町^{まち}の屋根^{やね}にかかりました。いま、彼^{かの}女^{じょ}は、正^{しょう}ちゃんをおぶって、寂^{さび}しい道^{みち}を歩^{ある}いていました。

「坊^{ぼっ}ちゃん、わたしが悪^{わる}かったのですから、どうか堪^{かん}忍^{にん}してくださいね。」と、彼^{かの}女^{じょ}はいいました。

子^こ供^{ども}は、それがわかったように、おとなしくしていた。そのとき、ちょうど、まんまるな月^{つき}が、林^{はやし}の上^{うへ}へ上^{のぼ}ったのであります。

「おお、いいお月^{つき}さまだこと。坊^{ぼっ}ちゃんのお母^{かあ}さんは、あの中に、おいでなさるのですよ

。「と、彼女^{かのじよ}は月^{つき}を指^{ゆび}さしながらいいました。正ちゃん^{しょう}は、じつと、月^{つき}を水晶^{すいしょう}のよう^{きよ}な清^{きよ}らかな目^めでながめていましたが、それらしいなにかが映^{うつ}つたのか、
「お母^{かあ}ちゃん、……お母^{かあ}ちゃん。」と、自分^{じぶん}も月^{つき}を指^{ゆび}さして、にっこりしました。——こ
れは、正ちゃん^{しょう}が、はじめて、この世^よの中の哀^{あわ}れを解^{かい}したときであつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集3」丸善

1928（昭和3）年7月6日

初出：「赤い鳥 第十九卷第六號」

1927（昭和2）年12月1日

※表題は底本では、「遠方《えんぼう》の母《はは》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：くろべえ

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

遠方の母

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>